みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モノと人をつなぐ：新たな知の創造に向けて＜基幹研究：オーストラリア先住民の物質文化に関する研究：民博収蔵の学術資料を中心に＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2024-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平野, 智佳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000114

モノと人をつなぐ
―新たな知の創造に向けて

平野 智佳子

本プロジェクトの概要

本プロジェクトの目的は、民博収蔵のオーストラリア先住民の資料を対象に日英対応型の新しいデータベースをつくり、その学術的な意味を明らかにすることである。研究期間は合計４年で、2022年度から開始した。対象となる資料は約3,700点で、日本において最も大きなオーストラリア先住民コレクションである。大半の資料は1980年代から1990年代にかけて、本館名誉教授である小山修三と松山利夫のプロジェクトを通じて収集された。収集地にはばらつきがあるが、とくに集中しているのはオーストラリアで最も多くの先住民が居住する北部と中央部である。

オーストラリア先住民コレクションの情報は、本館ホームページのデータベース一覧で公開されている「標本資料目録」から検索可能であるが、言語が日本語対応のみのため、非日本語話者には利用できない状態である。つまり、これは資料の制作地や収集地で暮らす先住民の人びとが自分たち、あるいは先祖が扱っていたモノの情報にアクセスできないことを意味する。こうしたアクセスの制限は、「先住民の文化的知識は誰のものか」というデータ主権にかかわる問題として先住民からの批判が高まり、世界各地の博物館に対応が求められている（近藤・平野 2023）。

この課題を解決するために、本プロジェクトでは日英対応型のデータベースを構築し、本館に保管されているオーストラリア先住民コレクションの情報をより適切なかたちで公開することを目指している。本プロジェクトの意義は、隔絶されていたモノと人をつなぎ、先住民、研究者コミュニティ、一般市民との間に新たな知を創造するフォーラムを生み出すことにある。

コレクションの特色

民博収蔵のオーストラリア先住民の資料には、大きく２つの特色があげられる。

１点目は、世界有数の1980年代コレクションであるということである。1980年代といえば、オーストラリア先住民の文化や社会への注目が高まり、先住民が制作する絵画や儀礼具、生活用品などが土産物として展開しはじめた時期である。遠隔のコミュニティには先住民の管理のもとで土産物の販売を仲介するクラフト・アドバイザーが現れ、民博収蔵のコレクションも彼らの協力を得て収集された。1990年代に入ると、先住民の制作物の中には美術工芸品としての評価を得るものも現れ、その市場価値を高めていった（Peterson et al. 2008）。つまり、1980年代から1990年代に収集された民博のコレクションは、オーストラリア先住民の物質文化が土産物から美術工芸品へと移行していったプロセスを検証するのに、きわめて有効な資料である。

２点目に、そのユニークな収集方法があげられる。収集者の一人である小山は、オーストラリア先住民の物質文化を選り好みすることなく、当時の生活で使用されていたありとあらゆるものを収集した。これは小山の専門であった考古学の手法におおいに影響を受けている。小山は、たとえば北部では先住民が暮らしていた小屋を一軒、中に置かれていた生活用品も含めて丸ごと買い受けたり、中央部では地方都市のアートセンターが仕入れた商品を２週間分そのまま入手したりしたという。がらくたから高価なものまで、あらゆるものを

オーストラリア先住民の展示図録をみる女性（2022年２月、ユラーラ、筆者撮影）

平野 智佳子（ひらの ちかこ）
国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授。専門は文化人類学。オーストラリアの中央砂漠を中心に現地調査をおこなう。おもなテーマはオーストラリア先住民の飲酒やキャンバス制作。業績として『酒狩りの民族誌』（御茶の水書房 2023年）、「分配行為にみるアナングのやり方」『文化人類学』86(2): 177-196（2021年）など。

収蔵庫での資料の熟覧（2023年10月、国立民族学博物館、筆者撮影）

含む民博のコレクションを、人類学者のハワード・モーフィは「まるで1980年代のタイムカプセルのようだ」と表現している。1990年代以降、オーストラリア先住民の美術工芸品が高騰し、資料の大量購入が難しくなったことを踏まえても、当館のオーストラリア先住民コレクションは、1980年代から1990年代にかけての先住民の暮らしを浮き上がらせる類をみない資料といえる。

実施内容と今後の課題

本プロジェクトでは、こうしたコレクションの特色をオーストラリア先住民の物質文化研究の中に位置づけて、その学術的な意味を明らかにする。メンバーは国内10名、国外9名で、当時の収集にかかわった者やアーカイブズ構築の経験者、先住民の物質文化に関する専門的知識を有する者などで構成される。そのうち3名がオーストラリア先住民のルーツを持つため、現地社会との協働に関して先住民視点の助言が期待できる。

1年次には、プロジェクトを円滑に進めるためのネットワークづくりを中心におこなった。アボリジニおよびトレス海峡諸島民研究所や、オーストラリア国立博物館、クイーンズランド博物館など主要な先住民研究機関を訪問し、本プロジェクトの情報共有をおこない、協力体制を構築した。

2年次には、収集にかかわった研究者やクラフト・アドバイザーに、資料収集時の様子について聞き取りをおこなった。そのプロセスでは、データベースから読み取れないような人間味あふれる収集の物語も聞かれた。そうしたエピソードは当時の先住民と博物館の関係を色濃く照らし出すものである。このようなモノをめぐるさまざまな物語を伝え、検証していくことも、モノと人とのつながりを主題とする本プロジェクトが取り組むべき重要な課題になるだろう。

既存のデータベースの日本語の情報を英語に翻訳する作業は1年次から現在にいたるまで継続的に進めている。用語の不統一や情報の不足、現地語表記の揺れがあるため、確認作業は一筋縄ではいかないが、オーストラリア先住民に関する専門的知識を有するメンバーの協力を得ながら修正と追記を重ね、情報を精緻化している。

本プロジェクトは2024年4月から3年次に入る。3年次には、仮構築したデータベースを活用して、専門職者や研究者、現地の住民を交えた意見交換をおこない、民博に収蔵されているオーストラリア先住民コレクションの学術的意味を検討する予定である。具体的には、国際シンポジウムを開催し、本館オーストラリア先住民コレクションを1980年代以降のオーストラリア先住民の美術工芸品の動向に位置づけて、その展開可能性と課題について議論を深めていく。そこで得られた知見はデータベースに反映させ、現地社会の文化の保全や復興に貢献することを目指す。

最終年である4年次には本プロジェクトの成果として出版物の刊行の準備を進める。その成果を海外の研究者、専門職者や現地の先住民、一般市民など、より広く発信できるように、日本語と英語で図書あるいは学術論文を刊行する。

今後の課題としては、文化の担い手である現地社会との相互交流を促進することがあげられる。民博コレクションの収集地でとりわけ資料数が多いのは8カ所であるが、細かくみると収集地は40カ所以上に及ぶ。また収集開始から半世紀近くがたち、すでに制作者が亡くなっていたり、現地社会との関係が途絶えていたりもする。こういった状況で、コレクションの情報や新たな知見を現地社会に還元することは容易ではないが、収集地に精通するメンバーや先住民研究組織に助言を受けながら、現地住民との良好な協力関係を構築し、モノと人をつなげることを進めていきたい。

引用文献

近藤祉秋・平野智佳子 2023「先住民とデジタル化する社会―先住民研究の新しい枠組みに向けて」『国立民族学博物館研究報告』48(1): 1-44。

Peterson, N., L. Allen, and L. Hamby 2008 *The Makers and Making of Indigenous Australian Museum Collections*. Melbourne: Melbourne University Press.